

秋の特別展

貝塚と縄文人のくらし

北区には中里貝塚をはじめとして多くの貝塚が発見されています。特に中里貝塚は近年の調査で日本最大の規模を持つ貝塚であることが確認されました。区内にはその他にも大小の差はあれ多くの貝塚が残されており、北区は貝塚の集中地といえます。さて、この貝塚とは縄文人が食べた貝を捨てたゴミ捨て場と考えられています。しかし、この貝塚を詳しく調べてみると、貝だけではなく魚や動物の骨も見つかります。また、これに壊れた土器や石器なども含まれます。このような貝塚から出土するものを丹念に調べると、縄文人がどのようなものを食べ、どのようなものを使ってくらしていたのかを知ることができます。貝塚はそこから縄文人のくらしの一端を垣間見ることができる、貴重なタイムカプセルなのです。さらに、貝塚の中には単なる日常的なゴミ捨て場ではないものがあることがわかってきました。今回の展示は貝塚と、それを形成した縄文人のくらし、そして貝塚が作られた頃の環境変化などがわかる展示を行います。



中里貝塚の貝層



飛鳥山遺跡の縄文土器

【会期】 9月23日(祝)
11月7日(日)

*観覧時間は午前9時30分から午後5時

【会場】 特別展示室 及び ホワイエ

【観覧料】 大人200円 小・中・高100円

【休館日】 9月24日(金)、27日(月)、
10月4日(月)、12日(火)、
18日(月)、25日(月)、
11月1日(月)、4日(木)

【講演会】 11月6日(土)
午後2時~4時
「貝塚からみた縄文人の生活」
講師：早稲田大学講師 樋泉岳二氏
*詳細についてはお問い合わせ下さい

博物館と学校

都市に住む子供たちの日常といえば、学校と塾、そしてゲームといったところでしょうか。今の子供たちに日々の体験が不足している、と言っても子供を取り巻く環境を変えることは容易ではありません。そこで近年、実物資料による学習を基本とする博物館の重要性が増し、博物館と学校とが緊密に連携することが望まれています。

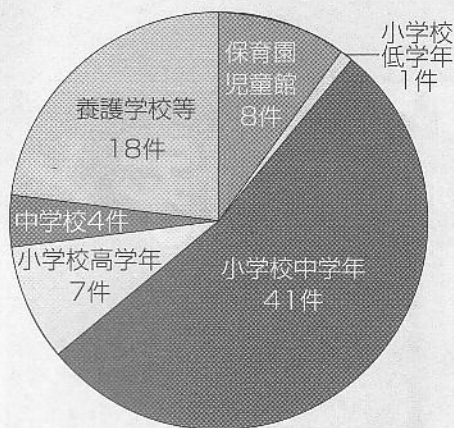
当館でも子供たちの博物館利用は大きな課題です。現在のところ子供の入館者の大部分を占めるのが学校団体見学です。特に小学3年生は「昔の道具」を通して地域を学習することから見学の中心となっています。また少数ながら、小学校高学年が考古学関連の展示を歴史の学習に利用しています。残念ながら中学・高校は少ないのですが、これに対し予想外に多かったのが養護学校などです。小学校に次ぎ、学校見学の2割を占めています。

学校対応は展示解説が中心ですが、展示面でも小学校の見学が多い冬季に民具展を開催しています。昨年度の「水とくらしの道具展」では、水桶の重さを体験できるコーナーを設けました。アンケートによると「さわられて良かった」「重くて驚いた」など体験コーナーに強い印象を持った回答が多く見られました。なかには授業の場を博物館に移して民具学習を実施した学校もあり、子供たちの好奇心や意欲に大きな手応えが感じられました。

常設展示については、やはり飛鳥山劇場はじめビジュアルな展示に人気が集まりますが、その一方で「説明があったので良くわかった」といった感想も目立ち、子供たちへの展示解説の重要性を痛感させられます。

すでに当館では学校と協議する場を設けて、博物館の活用を探っています。そして、いずれ子供たちにとって「連れられて行く」博物館から、「自分から行く」博物館となるように、当館も努力してゆきたいと思えます。

平成10年度 学校等の利用内訳(全79件)



見て、さわって、学ぶ子供達

イベントレポート



7月 富士講

12ヶ月めぐり

毎月北区内の寺社や行事等を見てまわる「北区12ヶ月めぐり」は8月で終了となりました。一年にわたって行われたので、参加者同志が親しくなり、和気あいあいとした雰囲気、北区の歴史を知ることが出来たようです。今後もこういった企画を！という声が聞かれた事業でした。

今年度は、「民具学講座」からスタートしました。「民具とは何か?」といった基本的なことを知ってもらったり、竹細工の職人さんの工房にも見学に行って来ました。7回の講座の中で、民具の名称、素材、使用方法などについて実習を交えながら楽しく学習しました。

夏は親子であるいは子ども同志で博物館に楽しんでもらおうと、たくさんの事業を行いました。そのうち幾つかをご紹介します。まずは「親子土器づくり」これは親子で一緒に縄文土器を作ってしまうという企画です。慣れない手つきで粘土をこねたり、縄目の文様をつけたりして、個性豊かな土器ができました。焼き上がった土器を手にして、楽しみながら手作業をした成果に満足したようでした。「博物館クイズラリー」は怪盗コン吉からのクイズを解きながら、13グループ(50余名)が参加して、飛鳥山公園内の各ポイントをまわりました。他にも「飛行機を飛ばそう」「子どものための北区史」等の多彩な事業を行いました。

博物館で荒川の自然を味わう法

生物を理学的に知ろうと思えば、実際の実物を観察するに勝るものはないと思います。つまり、「百聞は一見にしかず」です。しかし、北区飛鳥山博物館は動物園ではないので、命あるものを飼育するわけにはいきません。したがって、剥製や精巧な複製を用いて遠近法を取り入れながら実際の生態に近い雰囲気の中で生物資料を見られるようにした等倍の模型（ジオラマといいます）を開発しました。これが常設展示「荒川の生態系」です。

「荒川も昔はこんな生き物がたくさん棲んでいたんだよ」昨年、博物館がオープンした直後、年配の方からしばしば聞かれた言葉です。実はここで示した動植物はどれもこれも現在の荒川で生息しているものばかりなのです。多分こういう言葉が発せられた背景には普段あまり荒川の岸辺を散策していない日常があり、「こんな」という感覚は自然界からの距離を示しているように思われます。北区といえども、都市に長いこと住んでいると、自然からかなり遠のいた生活をしているんだなとつくづく思ったものでした。ただ、「たくさん」という感覚は当たりです。かつて模型を設計する際、生物資料を実際の生息密度に合わせて厳密に配置すべきか、実際の生息密度にこだわらずに総覧的に配置すべきか判断をせまられました。国内の他の博物館の自然ジオラマ模型も大概この2つのタイプに属します。現実の自然に近い模型を実直に制作するのはオーソドックスな方法ですが、長い目で見た時に資料的に少し寂しいとい

うか物足りない気がしました。この博物館では、自然観察の神髄は野外観察にあり、野外と全く同じものを室内にわざわざ造る必要はないのではないかと考えました。博物館の展示は野外観察への動機づけになればよいと判断し、結果的には数多くの思索ができる装置として後者を選択した経緯があったのです。

「荒川の生態系」で示したように、後背地に河川敷を有する荒川の岸辺では草地の生態と水辺の生態の両方が観察できます。荒川では1年のうち6月頃が特に生物の豊かな季節です。この展示をガイドとして、ぜひ実際の岸辺を歩いてみることをお勧めします。



ジオラマ点景

情報ボックス

〈博物館・あの部屋この部屋〉～収蔵庫～

博物館にとって一番大切な物、それは「資料」です。その資料を大切に保管しておく部屋が「収蔵庫」といわれるところ。常設展示室などでみなさんが普段目に見ている資料はごくごく一部で、その他大部分の貴重な資料が企画展や特別展、あるいは講座などでみなさんとお会いできるのを収蔵庫の中でじっと待っているのです。

当館には「一般収蔵庫」と「特別収蔵庫」という、2つの収蔵庫があります。一般収蔵庫には主に民具を、また特別収蔵庫には浮世絵や古書など、特に厳しい温湿度管理が必要なものを収蔵しています。収蔵庫はみなさんの目には触れることのない場所ですが、実は“陰の主役”ともいべき存在なのです。



一般収蔵庫内の民具資料たち

〈新着ビデオ速報〉～年代を測る～

博物館などにはよく「〇千〇百年前」などと説明の付いた土器等が展示されていますが、「その年代はどうやって判ったんだ？」と疑問を感じたことはありませんか。近年よく用いられるのが「ラジオアイソトープ（放射性同位体）」を使用した年代測定法です。このビデオ「年代を測る」ではラジオアイソトープの時計はどのようにして読みとるのか、その原理を分かりやすく解説しています。これを使った年代測定で最も話題になったのは、縄文土器の製作年代です。測定の結果、それまでの学会の通説は大きく書きかえられることになりました。その他、東大寺にまつわる伝説や、日本列島創世記の岩石など、年代測定の技術が果たした役割を紹介しています。



ビデオのタイトル画面

ビデオ・図書の見学は3階で！（無料）

『六あみだ詣』について

六阿弥陀詣では、江戸周辺の六ヶ寺の阿弥陀を巡拝することに由来し、江戸時代から明治にかけて、庶民、とりわけ女性に信仰と遊山をかねる郊外散歩として親しまれました。六阿弥陀の寺院は第一番・豊島の西福寺、第二番・沼田の延命寺、第三番・西ヶ原の無量寺、第四番・田端の与楽寺、第五番・下谷の常楽院、第六番・亀戸の常光寺です。区内には西福寺、無量寺、与楽寺の三ヶ寺があります。六ヶ寺すべて巡拝すると、里程は総計6里23町（約26km）に及び、これを1日で巡りました。春秋の彼岸、日は暖かく、風穏やかな中を、はるかに霞む筑波山を望み、白脚絆の下駄履きで、談笑していく趣は、のどかな江戸の風物詩でした。

六阿弥陀詣でを主題にした文芸に、十返舎一九の『六あみだ詣』があります。一九は明和元年（1764）の生まれで、姓は重田氏。名を貞一といい、通称は與七。同心・重田與八郎の次男でありました。『近世物之本江戸作者部類』には、「性、酒を嗜むこと甚だしく、生涯、言行を屑とせず、浮薄の浮世人にて、文人墨客の如くならざれば、書画等に愛せられて、暇あるをり、他の草冊子の画工をさへして、旦暮に給し、其の半生を戯作にて送りし」とあるように、決して高慢ぶったり横柄面をしない楽道家でありました。代表作としては『東海道中膝栗毛』が有名であり、軽妙かつ捧腹絶倒の極みとして愛されました。『六あみだ詣』は、文化8年（1811）上下二編を出し、翌年、嗣編二巻、10年に三編を上木して、世評はすこぶる好評でした。内容は、長屋の大家をはじめ井戸端のおしゃべり連が、亀戸の常光寺を振り出しに、路次、多様な人物を加えて六阿弥陀詣でに繰り出し、道行きの間答のなかに、処世の教訓を説いて



『六あみだ詣』文化8年 十返舎一九作
います。三馬の『浮世風呂』のような寸鉄きらめくエスプリの冴えはありませんが、道中の描写に近世の六阿弥陀詣での様子をよく今に伝えていています。本館所蔵の『六あみだ詣』は、文化8年の上下二巻本で、題簽には「六あみだ詣」とあり、角書に「申戯教諭」と記されています。序文、跋文は「東武逸民十返舎一九」とあり、画は喜多川月磨です。本書の写本としては天理大学図書館所蔵本が知られるほか、版本としては初編、三編が筑波大学図書館に、初編、二編が早稲田大学図書館に架蔵され、三編のみが愛知県岩瀬文庫に納められています。本館所蔵本は保存状態も比較的良好であり、地域を題材にした文芸として注目されます。

写真に見るあの日あの時



明治39年・田端

いかにも鄙びた農村風景と見えますが、これは明治期の田端を写した絵葉書です。使用済の葉書のため、明治39年を示す消印が薄く残されています。明治期までの田端は都会と郊外との境界であり、純然たる農村でした。明治初期の田端は人口わずかに540人、低地では稲作、台地側の畑地では麦や大根、瓜などを作っていました。しかし明治29年に田端駅が開設され、交通の便がよくなると、田山花袋が「しかし田端は夥しく変わった。全く立派な屋敷町になってしまっている。」（『東京とその近郊』大正5年）と記したように、田端はお洒落な新興住宅地へと変貌してゆきます。やがて大正12年の関東大震災によって更に人口が急増し、同時に田畑が広がるのどかな情景も失われていったのです。ちなみに昭和6年の田端の人口は26,010人と記録されています。

Q&A

① 博物館にはどんな人が働いているのですか？

「博物館ではどんな仕事をしているのですか？」とよく尋ねられますが、博物館の運営・維持には多くの人に関わっています。普段博物館内部の仕事をしている人は、館長はじめ事務職員、学芸員などがいます。館長は、博物館全体の管理責任者です。事務職員は、博物館の活動を円滑に進めるために必要な事務を執ります。学芸員は、展示や教育普及事業の計画を立て実施したり、調査活動等を行います。その他にも受付の人、館の安全を守る警備の人、館内を清掃する人等がいます。多くの人達の協力で博物館は日々スムーズに活動ができるのです。



博物館の顔・受付

博物館とこども

去る8月4日(水)に博物館クイズラリー「怪盗コン吉の逆襲」を行いました。昨年に続いて今年で2回目のクイズラリーです。ちょっとかいつまんで内容を説明すると、怪盗コン吉が博物館のある資料を偽物とすり替えたという設定。そこで、参加者がコン吉からの挑戦(クイズ)に答えていきます。全てのクイズを答えるとジグソーパズルのピースを受け取り、参加者全員が各ピースを持ち寄ると、すり替えられた資料が分かり、コン吉から本物を奪い返せるというストーリーです。ちなみに参加者は1グループ5名までの子供、あるいは子供と保護者です。おかげさまで13グループの参加があり、1時間半ほどの奮闘の後、最後に参加者全員に縄文メダル(縄文土器と同じ縄目文様を付けた素焼きのメダル)を配ってクイズラリーは終了しました。

このクイズラリーを行うにあたって参考にしたのは、テレビゲームにみられるロールプレイングゲームです。子供の興味を引くには、それなりのしつけや物語が必要であると考えたからです。しかし、これには限界があります。やはり、本物のゲームにはかなわないし、ましてやテレビゲーム全盛のこの時代に、クイズラリーなんぞに参加してくれるのであろうか不安でした。しかし、いざ蓋をあけてみると、子供たちは楽しそうにクイズに挑んでいました。やはり、自分で歩いて(走って)クイズを解くのは楽しいのでしょうか。

このクイズラリーの目的は、楽しく北区の歴史や自然を知ってもらおうというものです。しかし、それ以上の目的があります。普段あまり来ない子供たちに博物館を知ってもらうということです。子供にとって博物館とはどのようなものなのでしょう。おそらく、勉強をするところというイメージが強いのではないのでしょうか。このイメージを払拭するためにもクイズラリーはゲーム感覚で行ったのです。楽しみながら何かを知る、あるいは感じるができる場所。そんな博物館が子供にとっての理想に思えます。そのためにも、これからも様々な子供向けのイベントや体験教室を企画していく予定です。

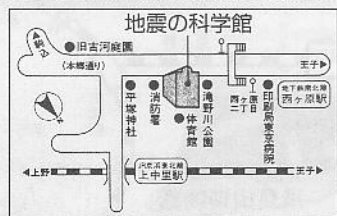


クイズラリーの1コマ 真剣にいどむ子供たち

博物館めぐり



入口の巨大な地球模型



各種体験は時間が決まっている。
お問い合わせ 03 (3940) 1811

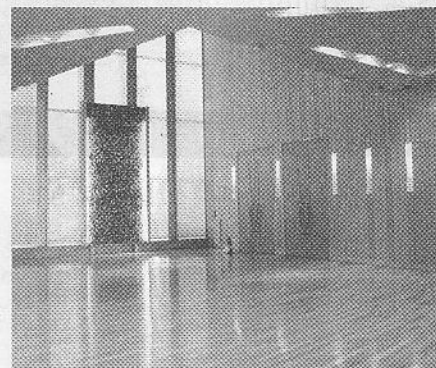
地震の科学館

日本は世界でも有数の地震国。平成7年の阪神・淡路大震災は、私たちに大きな衝撃を与えました。1999年7の月も無事に過ぎましたが、いつ、なにが起こるか分かりません。みなさんの備えは大丈夫?というところで、今回は北区西ヶ原にある「地震の科学館」をご紹介します!

地震の科学館は展示ホールと体験室から成っています。展示ホールでは、地震のメカニズムや非常持出品など万一の時の備え方などが分かり易く説明されています。展示を見終わったら、コンピュータを使って行う「サバイバルゲーム(地震Q&A)」「判タタン(判断力テスト)」「脳みそパニック(記憶力テスト)」にチャレンジ!一方体験室では、「地震の揺れ・煙」「応急手当」「消火作業」の各体験ができます。私は今回、起震機で震度7を体験!今から来ると分かっている、この揺れにはビックリ。阪神・淡路大震災の揺れはこれ以上というのですから、そのすさまじさは測り知れません。次は煙の充満した部屋からの脱出。煙の中では誘導灯など見えなくなってしまうことを初めて知りました。その他についても防災指導員の百瀬さんが丁寧に説明して下さい、日頃からの備えと正しい知識の大切さ、身の回りのものを有効に使うことなど、身を以て学ぶことができました。

Q&A ② ホワイエって何ですか?

博物館2階の企画展示室と講堂の間の空間をホワイエと呼んでいます。ホワイエはフランス語で溜り場、団欒、娯楽室の意味があり、また入口からホールなどの間にある広い空間で、休憩や歓談に使われる部分とされています。つまりホワイエは建物の入り口付近にある広い空間を指します。現在は、中里貝塚の剥ぎ取り標本が展示されており、利用者の方が椅子に座って休む場所として使用されています。当館のホワイエは自然光が入り開放的な吹抜け空間なので、今後企画展示や体験学習の会場として利用されていくことが期待されます。



ホワイエの広い空間

Museum Calendar

ミュージアム・カレンダー 9月～3月

9月	12日(日)	年中行事を楽しもう…月見
10月	5日(火)10日(祝)	土器拓本教室
	10日(祝)	江戸名所図会を読む(全5回)
	11日(月)	自然史野外巡検
	24日(日)	ビジュアル講座
	29日(金)	見学会/文学地図・田端
11月	3日(祝)	講座/写真で語ろう
	6日(土)	特別展講演会 「貝塚からみた縄文人の生活」
	21日(日)	中級考古学講座(全5回)
	23日(祝)	16ミリフィルム上映会
12月	23日(祝)	ビジュアル講座
2月	11日(祝)	16ミリフィルム上映会
	12日(土)13日(日)	遺跡探訪
	26日(土)	ビジュアル講座
3月	20日(祝)	講座/続・水道いろいろ

特別展
「貝塚と縄文人のくらし」
9月23日～11月7日

ミニ展示
「ぽかぽかあったか暖房具」
11月25日～12月5日

ミニ展示
「写真は語る」
12月16日～1月8日

企画展
(仮称)「カメラ展」
1月19日～2月27日

お耳を拝借!

- ・ビジュアル講座
偶数月に1回、ビデオや実物資料などを使い学芸員が毎回異なるテーマでお話をします。
- ・中級考古学講座
昨年度の初級考古学講座に続き、レベルアップした内容となっています。初めての方も受講できます。
- ・遺跡探訪
東京周辺の古墳や貝塚を見学する予定です。
- ・ミニ展示「写真は語る」
終戦直後の赤羽地区を写した写真を中心に、かつての北区の姿を伝える写真を展示します。
- ・企画展(仮称)「カメラ展」
北区在住である中一訓(なかかずのり)氏より寄贈いただいたカメラコレクションを一堂に公開する展示会です。カメラの歴史をふりかえるとともにカメラ収集の魅力を存分に探る予定です。

利用のご案内

- 【開館時間】 午前9時30分～午後5時
(有料の展示室への入場は午後4時30分まで)
- 【休館日】 毎週月曜日(国民の祝日・振替休日の場合は開館)
年末年始(12月28日～1月4日)
国民の祝日および振替休日の翌日(土曜・日曜日の場合は開館)このほかに臨時休館日等があります。

【常設展観覧料】

	個人	団体
一般	300円	240円
小・中・高	100円	80円

- ・小学生未満は無料
- ・団体扱いは20名以上
- ・三館共通券は当館のほか、渋沢史料館、紙の博物館の3館をごらんになれます。
(一般720円小中高320円)



編集後記

開館以来、多くの事業を展開してきましたが最近ではリピーターの方も増え、博物館が徐々に利用者の方々に浸透しつつあるという手応えが感じられるようになりました。今後より皆さんが日常生活の中で憩いの場所としたり、知的探求心を満たす身近な施設として利用していただける博物館づくりを目指していきたく思います。「ほいす」も第3号を迎え、更に良い情報をお伝えできる楽しい紙面作りへと試行錯誤していますので、ぜひ皆様の声をお寄せ下さい。(M.I)

北区飛鳥山博物館だより
ほいす Vol.3

発行 平成11年9月15日
 編集 北区飛鳥山博物館
 〒114-0002 東京都北区王子1-1-3
 TEL.03-3916-1133
 発行 東京都北区教育委員会
 〒114-0002 東京都北区王子本町1-2-1
 TEL.03-3908-1111(代)
 印刷 (株)内国社印刷所